令和６年度プロジェクト発表会・意見発表会講評

全体審査委員長　安　藤　義　道

総括

列島への寒波襲来で、一部地域では大雪により交通機関がストップするなど大きな乱れも生じるなか、3 日間の日程を滞りなく進行して無事終了できた発表会として、将来的に思い出に残るような会であった。

内容的には校内予選、ブロック予選を選び抜かれて来ているだけにすばらしくレベルの高いものだった。ある審査委員はそれを「多種多様な課題設定であり、消費者にも伝わる内容の発表であった。発表テーマも近年の傾向と異なったものが多く、学生諸君の意識の強さが感じ取れた。今後の日本農業の方向性に明るいものが見られて、とても有意義な発表会であった」とコメントしたが、審査員の声を代表するものであった。

また発表会中にこんなエピソードも見られた。参加者ではなかったが、わざわざ学校を休んで発表を聞きに来たという東海地区のとある農大生がいた。彼は「来た甲斐がありました。とても勉強になりました。私も来年是非ここに来られるように頑張ります」と言っていた。

充実した発表会であった。

1. プロジェクト発表　養成課程の部

発表テーマは果樹部門が一番多く 4 課題であった。内訳は桃が 2 課題とリンゴ、ブドウであった。次いで作物保護と果菜（イチゴ、スイカ)、家畜（飼料作物、受精卵移植)、稲作部門がそれぞれ 2 課題、残りは花卉、茶、大豆に関するもので各 1 課題であった。果樹と果菜が多いのは近年の傾向であるが、稲作や茶、大豆はあまり取り上げられてこなかった。今年の特徴といえる。その意味でバラエティーに富んでいたという印象である。

発表者は男性 10 人、女性 5 人で男性の活躍が目についた。次年度には女性

の巻き返しと奮起を期待したい。

研究内容として技術開発はもちろんであるが、地域特性や付加価値を追求したもの、消費者を意識した研究が目を引いた。そうした傾向の中で、審査員の評価が高かったのは、研究上の創意工夫や成果の判断に加えて、成果の具体的展開や応用への可能性に富んでいるものであった。今後の研究の参考にしてもらいたい。

2. プロジェクト発表　研究課程の部

例年同様、発表が 3 課題と少なく、今後のあり方について検討の余地があるとの声も聞かれた。部門別の内訳は畜産 2 課題（酪農、和牛）と花であった。発表者は男性が 2 人、女性が 1 人であった。

畜産はゲノム評価を用いた牛群改良、飼料のコスト削減、花もコスト削減を目指す自家育苗の研究で、研究課程が目指す経営管理能力の向上というテーマに沿った研究であった。3 人の発表については、態度や内容に大差はなく、どの発表も十分練習を積んできている、との評価であった。

そんななか優劣をつけたのは発表のわかりやすさとパワーポイントの専門用語を門外漢にもやさしく解説でき、さらに質疑応答においても想定外のことにはっきり受け答えができるという理解力であった。今後の研究の参考にしてもらいたい。

3. 意見発表の部

発表者は男女半々で、どちらも自信をもって堂々とした態度で発表できていた。会場の聴衆に語りかけるような余裕をもった語り口までみられたほどだった。内容的には新規就農への想いに集中していたように思われる。

開催要領では意見発表の内容として、「大学校の学習や農林業経営、地域の農山村環境や新規就農等について日頃考えていることや想い」とかなり幅があり、審査項目にも「地域的、社会的広がりがある」とあるのでもう少し内容的

に広がりがあってもよかった。

また、審査項目には意見・提言の内容として「表現性と創造性」「夢や希望を具体的に持っているか」というのがあるが、審査員からは「少々具体性に欠ける」との指摘があった。意見発表には農大生としての夢や希望が求められているが、ただそれらを羅列的に訴えるだけでなく、同時に解決のための「実現性」の提示が伴うべきだ、ということである。

「高齢化する農村や増加する耕作放棄地、農業の労働力不足に貢献したいとする意欲は買うが、求めたいのは具体的な解決法」「いまの農村を守るということだけではなく、新しい形の農村の姿の提示」がほしい。そのためには「もっと農村の現実を見ることを求めたい」、というのが審査員が要求していることである。

採点上評価が高かったのは具体性に富んだ発表であったことはいうまでもない。審査員の厳しい意見は今後の学習の参考として生かしていってもらいたい。

おわりに

厳しい寒さと大雪による交通事情不安な中での開催であった。しかし、発表会場は寒さを吹き飛ばす熱気に包まれていた。また、あちこちで名刺交換をして、打ち解けて談笑する全国交流ならではの光景もあった。

こうした栄えある場を用意して、見事な運営を行ってくれた当番校の学生諸君や指導職員、さらに提出が遅れる原稿にヤキモキしながらも何とかこの発表会を実りあるものにしてくれた大学校協議会の事務局にお礼を申し上げたい。

審査委員会の席で、何人かの委員から「賞をもらった人のその後が知りたい」「今日の発表者たちも、10 年後、今度は記念講演の講師を引き受けるぐらいの実践力のある農業者へと育ってほしい」との声があがった。大いに期待したい。